

第 4 号



パピルス & エレクトロニクス

はあひろにくす

大阪工業大学中央図書館

〒535 大阪市旭区大宮5-16-1

☎ 06-952-3131

Alles in Ordnung!

——西ドイツ留学記——

栗田章光

(工大・土木工学科・講師)

ドイツ語で最も重要な名詞の“性”を憶えるには、ドイツ語の先生がいわれる通り名詞の前にder, die, dasのいずれかをつけて憶える以外に道はない。ドイツ人といえども苦労した結果名詞の性を身につけている。ドイツ人の性格をよく表わす言葉のひとつとして“Alles in Ordnung”がある。直訳すれば“全てが秩序の中にある”ということになるが、結局は“万事OK”の意味である。ルール地方の人達は“Alles klar”という言葉をよく使う。疑問に使えば“解りましたか?”になるし、普通に使えば“問題なし”という意味になる。商店で買物をしてお金を払った直後にでる言葉でもある。

ところで、西ドイツの面積は日本の68%しかない。そこに周知のdie Autobahnが約7500km(日本は約3000km)にわたって建設されており、速度無制限でかつ無料である。走行中不愉快な橋梁の伸縮継手の数が少ないし、道路の整備も完璧だ。日本人はドイツで“車は走るためにある”という当り前のことを痛感する。私もドイツ入国後早速中古車を45万円で購入した。車はAudi 100の78年型で約13万km走行したものであった。私は1年で約2万

km走り、離独時に30万円で売ってきた。このように車は長持ちするし、ドイツでは物を大切に作る習慣が強いので、中古車の値段もあまり下がらない。日本では当然廃車になる様な車でも大事に利用されている。大学での友人Dr. Bergmann氏のAutobahnでの常速は160km/hで、親友Holtkamp氏は140km/hであった。私は120km/hと決めていた。ドイツ人は物個有の目的なり特質(性)を重要視する。だからAutobahnでは速度を無制限にして高速道路としての機能確保に努力するし、料理の味付けをうすくして食物個有の味をたべたがる。

車に関する話を続けよう。ドイツに10ヵ月以上滞在すると日本の運転免許証をドイツ語に翻訳するだけでドイツの免許証が入手できる。ドイツでは一生懸命免許証の書き換えをしないので経済的である。また、ドイツの社会生活ではアルコールは欠かせないので、血液中のアルコール濃度が0.8‰(注)までの飲酒運転が許されている。したがって各人は体格



に応じて飲酒運転可能なアルコール量を心得ている。車検制度にも興味がある。私の車の車検(TÜV)がこの8月の初めにきた。Bergmann氏のすすめでは直接車検場へ行き、そこで悪い個所を指示してもらい、その後に修理工場へ行けば安上がりとのことである。早速私は予約申込みをし、検査を受けた結果全てOKであった。検査のポイントは他車に迷惑をかけるためのブレーキ、ハンドルとライトの三

つであり、検査官からまた2年後に来いといわれた。合理的である。エンジンは見ない。エンジントラブルが起きた場合、被害をうけるのは自身だからだ。検査の直後Bergmann氏は私に“どうだった?”とたずねたので、私は直ぐに“Alles in Ordnung!”と答えた。

(注) パーミル per mille (‰, 割合を表わす語, 千分率, すなわち, ある量が全体の1000分のいくつを占めるかを表わす, ドイツではプロ・ミッレ pro Mille(ラテン語)ともいう。

My Stay in Osaka Institute of Technology

About five months ago I came to Japan on a one-year scholarship to study mechanical engineering. The scholarship was offered by the government of Japan through Japan International Co-operation Agency (JICA). This is in accordance with international technical co-operation between the government of Japan and Kenya.

A few years ago the government of Japan and Kenya jointly co-operated in the construction of Jomo Kenyatta College of Agriculture and Technology. The objective of the College is to train middle management technical manpower in the fields of agriculture and engineering. Presently my college through the assistance of JICA is training its future lectures here on short courses. Hence this explains my presence here.

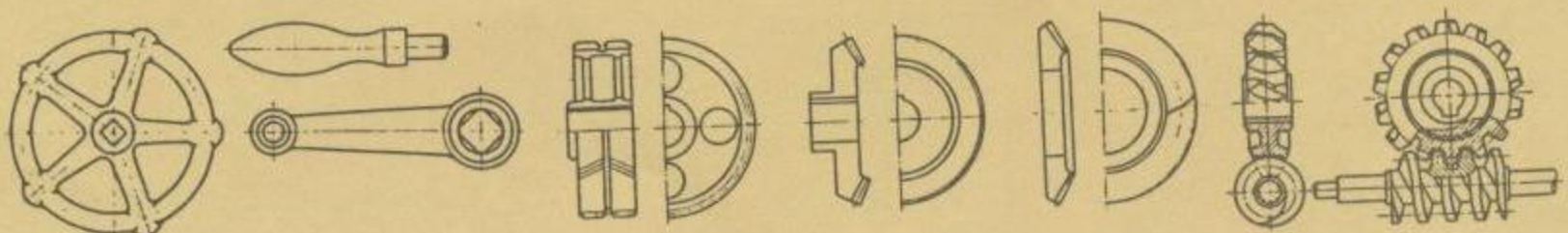
My training in the Institute and as a whole in Japan consists of lectures and practical work. Prof. Masaki is in charge of my training in the Institute. Although I have not stayed very long in the Institute I think the students are generally hard working.

I wish to extend my thanks to all the Institute staff for their continuous assistance.



G. N. Thoigu
Lecturer,
Department of Mechanical Engineering,
Jomo Kenyatta College of Agriculture and
technology

(工大・機械工学科・研究生)



□シリーズ□ ～歴代館長が語る～

私の館長時代

(S48.4.1～50.3.31)

亀山 享

(5代館長・工大・一般教育科・教授)

もう一年以上も前のことと思うが、第2代館長の田先生と、私の室で烏鷺(うろ：囲碁)を楽しんでいたとき、図書館から田先生に電話があって、何やら困られた様子で長いこと話をしておられた。あとで何ですかと聞くと、実は図書館長時代の思い出のようなものを書いてほしいとのことだが、何分にも古いことなので、ずい分お困りの様であった。その時は、自分とは何の関係もないこととと思っていたのだが、その後「ばびろにくす」の創刊号が出て、シリーズ「歴代館長が語る」になっているのを見て、これはもう逃れられないものと覚悟はしたものの、自分の場合はまだまだ先と、たかをくくっていた。ところが、第3号福島館長時代が出たと思ったら、もう旬日位にして図書館から早速依頼の電話であった。さて、何を書いたらよいのか。

昨今とみに記憶力が衰え、物忘れがひどく、知人の名前がどうしても思い出せなかったり、平生使い慣れている筈の字が、なかなか出てこなかったりすることが多い。そんなとき、座右においてよく使う便利な辞典に、「和英併用机上辞典」(誠文堂新光社)というのがある。和英併用という点で、学生諸君にも便利ではなかろうかと思うが……。私の持っているこの辞典の表紙には、金文字で、第35回、私立大学図書館協会、総大会、於駒沢大学図書館、昭和49年、紀伊国屋書店、と印刷してある。つまり、これはこの大会のときに、紀伊国屋書店から参加者に贈呈されたものである。

ところで、図書館関係の集まりはいろいろあって、この私立大学図書館協会だけでも、全国大会のほか、西地区部会が春秋2回の総

会と研究会、および、図書館長並びに主務担当者研修会等があり、そのほか、国、公、私立一緒の日本図書館協会等、大抵は立派な図書館を持っている大学が、会場校に選ばれていて、終了後、その図書館施設を見学させて頂く習慣になっていた。

本学の図書館は、今でこそ独立した建物で、コンピュータが導入され、全国の大学図書館の中でも、有数の規模を誇る立派なものとなっているが、当時は、6号館の3・4階にあって閲覧室も狭く、昭和49年6月頃によく、5階に約100名位収容の閲覧室が出来た程度であった。したがって、立派な他大学の図書館を見学する度に、いつになったらこれらに比肩できるようになれるのかと、思うばかりであった。それでも、大学開学当初、貧弱な図書館をなんとか充実してほしいと、学生達が自発的にお金を出し合ったり、手持の図書を持寄ったりした時代もあったことを思うと、本当に感無量の思いである。

また、いつか東京で図書館関係の集まりがあった折、藤田理事長のお伴をして、国会図書館を見学したことがあった。館長の配慮で、館内を隈なく案内して頂いたこと、今も忘れがたい良き思い出となっている。

図書館長としての2年間に得たものは、小さな辞典を知ったことと、国会図書館を見学し得たことだったろうか。



図書館活用の手引き ③ 語学について

ご存知ですか？

語学テープは第1図書室、入って左側のキャビネットの中にあります。その上に並んでいるのがテキストです。全部で13種類の言語があります。①英語②ドイツ語③ロシア語④フランス語⑤スペイン語⑥中国語⑦朝鮮語⑧イタリア語⑨インドネシア語⑩ヘブライ語⑪アラビア語⑫ギリシャ語⑬スワヒリ語などです。まだ聞いたことのない君、一度聞いてみませんか。

さて、関心はあってもなかなかモノにできないのが語学です。そこで、元ESSの西出君と加納君に聞いてみました。要約すると次のようになります。①語学はむずかしいという先入観を捨てる（言葉は人間であれば誰でも理解できるものなのです）。②語学にまず触れ

る（何事も実際にやってみなくてはダメだということです）。③学習の場と教材を確保する（たとえばESSに入ってみるとか…）。④繰り返し練習する。⑤学習を継続させる。

だいたい以上のようになりますが、少しでも学習した経験は多少とも自信につながるのではないのでしょうか。一度身につけた語学力も数学の公式と同じで、長い間使わなければ忘れてしまいます。しかし、過去の経験は中断から再開する場合において絶対に有益です。

現在、中央図書館に所蔵する語学テープは、2500本あります。生かすも殺すも君たち次第です。学生時代こそ、語学をモノにするチャンスではないのでしょうか。希望があれば出来るかぎりの充実をはかり、諸君の学習意欲にこたえたいと考えています。

編集後記

○「万事OK!」届いたばかりの原稿を見てニヤリ。

栗田先生は昭和57年9月から58年9月までの一年間、西ドイツ・ポッフム大学の構造工学研究所で鋼コンクリート合成構造の研究をされてきました。研究に明け暮れる生活の中にドイツ人の合理主義と先生のユーモアを見ることができました。

○亀山先生には館長時代の古い記憶を手繰ることの困難を、重々承知の上でお願いしました。「物忘れがひどく……」とはご謙遜で、当時を知らない者にとって、貴重な証言をいただくことができたことを感謝します。

○G. N. Thoiguさんは昨年9月にケニアから来られました。本学での研究科目は機械工学で、本稿はThoiguさんの指導教授である真崎先生にお世話いただきました。

次にケニア共和国（Republic of Kenya）を簡

単に紹介します。

（面積）58万3千平方キロ（日本の1.5倍）

（人口）1715万人

（主要言語）英語、スワヒリ語

出典：世界の国一覧表 1983年版 世界の動き社

国名の由来は、アフリカ第2の高峰、標高5195メートルのケニア山から来ている。ケニアという名称は、ケニアのカムバ語キーニア（Kiinyaa：縞のある山、またはダチョウの山を意味する）からでたものといわれている。

出典：国のシンボル 頌文社

